# 採卵鶏（白玉鶏）の鶏種別能力比較

## 研究のねらい

畜産試験場では、昭和 39 年から鶏の経済能力検定に取り組み、鶏種の能力・特性について 72 週齢までの調査結果を公表し、生産者や関係者に広く活用されております。

しかし、近年、育種改良の進展により産卵持続性が高まるなど、72 週齢までの調査では十分な評価ができない状況となりました。

そこで、国内最長となる 100 週齢までの調査を平成 26 ～ 30 年に５回実施し、白玉鶏の鶏種別能力の明らかにしました。

写真　白玉鶏の試験実施状況

## 技術の特徴

1　県内で流通している鶏種のうち４鶏種は、100 週齢でヘンハウス産卵個数（鶏群の総産卵個数÷成鶏舎導入時羽数）が 500 個以上となり、特に長期飼育に向く鶏種と考えられました（図）。

2　産卵個数が多い鶏種は、生存率が高く、比較的卵重が軽い傾向にあります。また、同一鶏種でも年度により産卵個数の変動が多い鶏種は、卵重の重い年の生存率が低くなります。重い卵を長期間産卵することは大きな負担であり、産卵時の生殖器の物理的なトラブル（出血等）が生存率の低下に大きく影響しています。

3　約２年間飼育するため、２回冬を迎えます。２回目の冬に舎内温度の急激な低下や飼料切れを起こすと休産（換羽）する個体が生じます。そのため、この時の温度管理が重要なポイントとなります。

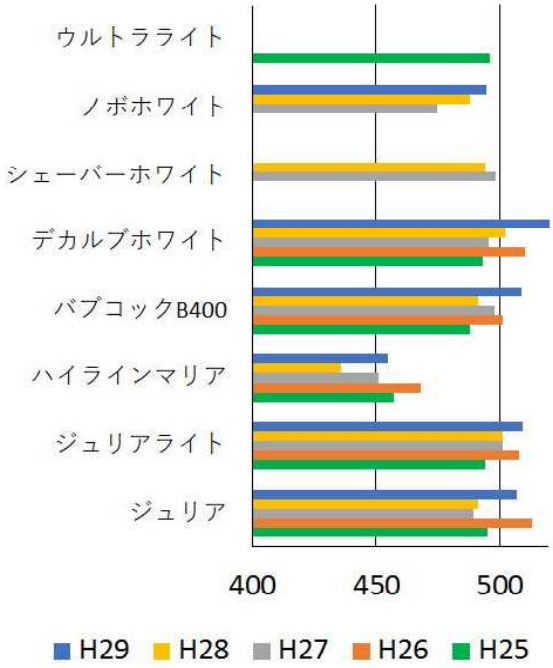


図　100週齢のヘンハウス産卵個数

## 今後の取り組み

今後も 100 週齢までの調査を継続し、情報発信を行います。また、白玉鶏のほとんどは外国の鶏種なので、日本の市場に対応（品質重視や農林規格）した長期飼育技術の開発を進めます。

（執筆者：後藤　美津夫）

連絡先：畜産試験場 養鶏係（電話027-288-2222）